

【原著論文】

中国・内蒙古自治区の小学校の体育授業における改善の効果に関する事例研究

—子どもによる運動有能感・運動習慣に着目して—

王 明亮*1・伊藤 雅広*2・松本 健太*3・滝沢 洋平*3・
岡田 雄樹*4・近藤 智靖*3

*1 日本体育大学大学院教育学研究科博士後期課程

*2 日本体育大学大学院体育科学研究科博士後期課程

*3 日本体育大学

*4 日本福祉大学

本研究の目的は、中国・内蒙古自治区の小学校の体育授業における改善の効果に関して検証をすることである。具体的には、高橋健夫らが提唱する「よい体育授業」の基礎的条件に基づいて、日本の体育科教育学の専門家が指導を行い、中国の教師の授業に関する考え方や指導方法がどのように改善されたか、また、それが、子どもの運動有能感と運動習慣に影響をするかを検討した。対象は、小学校の女性教員1名であり、4年生（205名）のバスケットボールの授業（27回）であった。分析方法は、次の5点である。

- 1) 教師による「感想・志向性」
- 2) 授業場面の期間記録
- 3) 相互作用行動
- 4) 運動有能感
- 5) 運動習慣

結果は、次の通りである。

- 1) 教師主体から子ども主体の授業へと考え方が改善した。
- 2) マネジメントと学習指導場面の時間が減少し、運動場面の時間量が増えた。
- 3) 教師の否定的なフィードバックが減少し、肯定的フィードバックや励まし行動が増えた。
- 4) いくつかの運動有能感得点で有意な差がみられた。
- 5) 運動習慣の得点が改善された。

こうした一連の結果から、日本での理論を基に中国の体育授業を改善していくことで、子どもの運動有能感及び運動習慣の改善が明らかになった。

キーワード：中国・内蒙古自治区，よい体育の授業，運動有能感，運動習慣

A Case Study of the Improving Effect on PE Classes of Elementary School in the Inner Mongolia Autonomous Region of China

— Focus on the Sport competence and Exercise habits of children —

Mingliang WANG*¹, Masahiro ITO*², Kenta MATSUMOTO*³, Youhei TAKIZAWA *³,
Yuki OKADA*⁴, Tomoyasu KONDOH*³

*¹ Graduate Student of Doctor Course, Graduate School of Education,
Nippon Sport Science University

*² Graduate Student of Doctor Course, Graduate School of Health and
sport Science, Nippon Sport Science University

*³ Nippon Sport Science University

*⁴ Nihon Fukushi University

The purpose of this study was to investigate the improving effect of PE Classes in elementary School in the Inner Mongolia Autonomous Region of China. Specifically, We taught the fundamental important concept of “Effective PE classes” which was pointed out by Japanese Prof. Takeo Takahashi to elementary school teacher in China. We analyzed how the teacher improved her teaching concept and methods. After that how the improvement of teacher’s concept and methods was influenced on the Sport competence and Exercise habits of children. We chose a female teacher of elementary school. 27 basketball classes of 4th grade children (205 Children in total) were used as a method of research. The data was analyzed according to the following five measures.

- 1) Questionnaire "impression and orientation" by teacher
- 2) “Times Allotted to Each Episode of Teaching”
- 3) Teacher’s Interaction
- 4) Questionnaire "Sport competences of children”
- 5) Questionnaire "Exercise habits of children”

The main results were as follows:

- 1) Her concept of PE classes changed from teacher centered to children centered.
- 2) The time for management and instruction of PE classes was reduced and the time for motor skill learning was increased.
- 3) Amount of negative feedback was reduced and positive feedback and encouragement were increased.
- 4) Some Scores of "Sport competences of children” were statistically better.
- 5) All Scores of "Exercise habits of children” were statistically better.

Through this research we clarified that the PE Classes in China were improved through Japanese PE theory and then such the improvement was influenced on the Sport competence and Exercise habits of children.

Key words: inner mongolia autonomous region of china, effective PE classes, sport competences, exercise habits of children

1. 研究の背景

中国では、子どもの発育発達や体力・運動能力及び健康の実態を把握するために、1985年からほぼ5年に1度の頻度で、「中国学生体質与健康調研」調査を実施している。その調査結果によると、近年の子どもの身長、体重、胸囲が伸び、低体重、栄養不足、貧血及び虫歯などが減少したものの、その一方で子どもの体力・運動能力の低下、肥満と視力の状況は悪化し続けている。その背景には、スポーツや運動遊びの減少が要因であることが指摘されている(中国学生体質与健康研究組, 2012)。例えば、「中国学生体質与健康調研報告」(中国学生体質与健康研究組, 2012)では、子どもの遊びの上位3位はテレビやネットの時間、雑誌・漫画・新聞を見る時間、ゲームをする時間であり、運動遊びの時間は最下位を示している。こうした子どもの遊びの変化は、子どもの体力・運動能力の低下や肥満を引き起こしている要因の一つであると考えられる。

こうした課題に対して、日本では、学校現場や行政、さらには大学などの研究機関において、様々な方策について検討されている。その中で、学校現場を対象として概ね二つの方向が指向されている。一つは、生活習慣を改善することである。これらは、生活全般の身体活動量の増加を企図している。もう一つは、体育授業を改善することである。全ての子どもが履修をする体育授業を通して、子どもの運動に対する「意欲・関心・態度」を高め、生涯スポーツ実践者を育成することである。

中国では、2007年から子どもの身体活動量を増加するために、全ての小中学校においては「陽光体育」の政策を実施している。しかし、体育授業の改善を指向する取り組みはみえない状況である。

日本では、高橋らを中心として、米国の体育授業に関する知見を基に、子どもの行動観察や意識調査を行い、授業改善を試みる研究が数多くある。例えば、体育授業中の運動時間やマネジメントなどの時間の割合を記録していく期間記録法や、教師の働きかけに着目した相互作用行動などの研究がみられる(深見ら, 2000)。高橋は、こうした一

連の研究の知見を生かして、子どもが評価するよい体育授業としてまとめている(高橋ら, 1994a)。また、運動を継続的に行うためには、運動することが楽しいから運動に参加するというような内発的動機づけに基づいた参加が重要であり、運動に関する内発的動機づけには運動有能感を高めることが重要であると指摘されている(岡沢ら, 1996)。さらに、松本・竹中は、運動有能感が高い者にとって、運動は自分自身が有能であることを感じられる機会となるため、積極的に運動を実施することを確認している(松本・竹中, 2004)。

日本の研究者は、上述のように、内発的動機づけの理論を基にしながら、その成果と体育授業とを関連づけ、運動有能感が高い子どもは低い子どもに比べ、体育授業評価・態度評価が有意に高い傾向を示すという知見を明らかにしている(北ら, 1995)。これらは、子どもが運動の楽しさを体験しながら、運動有能感を高めていくことが大切であることを意味している(岡澤・諏訪, 1998; 岡澤・三上, 1998; 岡澤・仲田, 1998)。また、こうした運動有能感を高めていくことこそが、その後の運動習慣の形成に影響すること(武田, 2006)も報告されている。

以上のような、子どもが評価するよい体育授業の条件に基づいた授業改善や、それに伴った子どもの運動有能感や運動習慣に及ぼす影響に関する研究は、2000年から2019年の中国体育科学学会の雑誌を散見した限り、見当たらないようである。

2. 目的

前項で述べた背景のもとに、本研究では、以下の2点について明らかにする¹⁾。

①まず、高橋らが提唱する子どもが評価するよい体育授業の基礎的条件²⁾に基づいて、授業を行う教師に対する指導を行い、授業を行う教師の授業に関する考え方や指導方法の改善を図る。

②次に、上述の手続きによって授業を行う教師の授業への考え方や指導方法の変化が、子どもの運動有能感と運動習慣に影響をするか否かを検討する。

こうした研究を通じて、中国の子どもの運動有能感を高め、運動習慣を向上させる授業のあり方を明らかにする。

3. 方法

上述の目的を達成するために、以下に述べる方法を用いた。

3.1 調査の概要

1) 期日・対象

調査は、中国・内蒙古自治区のある小学校で行った。授業は、教員歴 10 年の体育専科の女性教師 1 名が行った³⁾。対象は、4 年生の 4 クラス (計 205 名) のバスケットボールに関する授業 (計 27 回) であった⁴⁾。その授業における教師や子どもの活動を分析の対象とした。調査の時期は、2018 年 3 月 21 日から 6 月 15 日の間で実施した。

2) 「教師と子どもの変化」のとらえ方

①教師に対しては、「感想・志向性」、期間記録、相互作用行動という視点から検討した。②子どもに対しては、質問紙法を用いて、運動有能感と運動習慣という視点から検討した。調査デザインの概要を表 1 に示した。

表 1 調査デザインの概要 (筆者作成)

改善前		改善		改善後	
単元前	授業				単元後
	1	2~3	4~8		
運動習慣 運動有能感	—	感想・志向性	—		運動習慣 運動有能感
	授業場面の期間記録 教師の相互作用行動				

3.2 教師に対する指導

教師に対する指導は、以下に述べる方法で行った。

1) 講義や授業改善するための指導

授業に対する教師の考え方の改善を目指して、日本の体育科教育学を専門とする大学教員一名が、高橋らの提唱している「子どもが評価するよい体育授業」の特徴及び条件の中の「基礎的条件」に

関する講義を行った。その後、授業に対する教師の考え方の変化の実態をとらえるために、教師に対して「感想・志向性」の質問紙調査を実施した。さらに、この大学教員は、講義後に、この教師による 2 回目の体育授業を観察し、実態を確認した上で、授業場面や相互作用行動についての指導を行った。

2) 「日本の体育授業映像」による指導

教師の授業に対する考え方や行動を改善するため、日本の研究指定校の体育授業の映像を教師に見せ、その後に「感想・志向性」に関する質問紙法による調査を行った。このような調査により教師の授業に対する考え方の変化を確認するようにした。

上述の授業に対する教師の考え方の改善を確認するための、具体的な方法は、以下に述べるものであった。

(1) 教師の「感想・志向性」

「講義及び指導・映像の視聴」を行った直後に、「①体育授業についてのわかったことや思ったことは_____。②今後の体育授業で_____をします。」という質問により、教師の「感想・志向性」を確認した。

(2) 授業場面の期間記録法

期間記録は、高橋ら (1994b) が体育授業場面について、「マネジメント場面」「学習指導場面」「認知学習場面」「運動学習場面」という 4 場面に分節化していた⁵⁾。これらの区分を援用し分析を行った。具体的には、「体育授業場面のコーディングシート」を用いて、授業映像を見ながら時間帯を記録し、各場面の時間量及び頻度を集計した。授業場面の時間量は、「各場面時間量合計÷全授業時間量×100=各授業場面割合 (%)」という視点で算出した⁶⁾。

(3) 教師の相互作用行動

教師の相互作用行動とは、授業中に教師と子どもとの間に情報交換する行動のことであり、具体的には、「発問、受理、フィードバック (肯定的・矯正的・否定的)、励まし」などの行動を指している。本研究では、運動学習場面での肯定的フィー

ドバック、矯正的フィードバック、否定的フィードバック、励まし行動を検討した。

3.3 分析の方法

授業改善前後における子どもの変化は、運動有能感と運動習慣という2つの視点からとらえることができる。これらの詳細は、以下に述べるものであった。

1) 運動有能感

運動有能感(岡澤ら, 1996)は、「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」の3因子⁷⁾、各因子4項目、合計12項目の質問で構成されている。

各因子において、それぞれの項目は、「A:よくあてはまる」は5、「B:ややあてはまる」は4、「C:どちらでもない」は3、「D:あまりあてはまらない」は2、「E:まったくあてはまらない」は1、という5段階から回答を行う5件法を用いた。

2) 運動習慣

運動習慣の調査は、子ども達の学校及び放課後の運動への取り組みについての調査である。具体的には、①朝の授業前に運動をしていますか、②昼休みに運動をしていますか、③放課後に運動をしていますかの三つの質問から構成した。回答は、「はい」か「いいえ」で回答する2件法を用いた⁸⁾。

4. 結果

4.1 教師の授業に対する考え方・行動の変化

1) 教師の授業に対する考え方の改善の様子

教師の授業に対する考え方の改善の様子を表2に示した。表2の志向性は、子ども主体の活動が記述されている。このことは、教え込む授業から子ども主体の授業へと考え方が改善したといえる。

表2 改善後の教師の「感想・志向性」(筆者作成)

感想	志向性
<ul style="list-style-type: none"> 先生から、私の授業改善に関してたくさんの指導を受けたいです。 教師の話は少なく、子どもを精一杯運動させることが大切だとわかった。 授業中、子どもを褒めることが大切だとわかった。 技術を教えるのは大切ではなく、子どもを楽しく、精一杯運動させ、運動習慣を育成することが大切だとわかった。 先生の講義や指導を受けて、いろいろな教授方法がわかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業で運動遊びを中心にする。 目的を持たせて、自主的に学習をさせる。 学習内容を簡単なことから難しいことへ、何回も練習させる。 グループを分けて競争させる。 子ども全員を運動させる。 集合時間を短縮するために、綺麗に並ぶのではなく、直接先生の周辺に集合させる。 子どもたちがお互いに、積極的な援助を行うように指導する。 子どもたちがお互いに、教え合ったり、学び合ったりするように指導する。

2) 授業に対する教師行動の改善

① 教師の授業場面の改善

教師の授業場面は、「マネジメント場面」「学習指導場面」「認知学習場面」「運動学習場面」の各場面における時間を計測した。その結果を表3に示した。表3に示すように、授業場面の時間量は、改善前に比して改善後の「マネジメント場面」と「学習指導場面」の時間量の割合の平均値が下がり、一方で、「運動学習場面」の時間量の割合の平均値が大幅に上がった。また、授業場面の頻度に関しては、改善前に比して改善後の「学習指導場

面」と「運動学習場面」の頻度の平均値が下がった。

表3 改善前後の授業場面の割合・頻度
(筆者作成)

		時間量の割合(%)		頻度(回)	
		改善前	改善後	改善前	改善後
授業 場 面	マネジメント	30	24	7	9
	学習指導	26	13	11	8
	運動学習	44	63	12	8
	認知学習	0	0	0	0

② 教師の相互作用行動の変化

改善前と改善後の教師の「運動学習場面」における相互作用行動を比較した。その結果を表4に示した。表に示したように、教師の否定的フィードバックが減少し、肯定的フィードバックや励まし行動が増えた。

表4 改善前後の相互作用行動（回数）
（筆者作成）

		改善前	改善後
教師の相互作用行動	肯定的フィードバック	2	11
	矯正的フィードバック	48	50
	否定的フィードバック	10	6
	励まし	5	29
	合計	65	96

4.2 教師の授業の改善に伴う子どもの変化

教師の授業に対する改善に伴う子どもの変化を、運動有能感と運動習慣のそれぞれの変化でとらえた。これらの結果を分けて、以下に示す。

1) 運動有能感の変化

運動有能感の各質問の尺度に対して、改善前後の子どもの人数を調べた。その結果を表5に示した。表5に示したように、「C:どちらでもない」、「D:あまりあてはまらない」、「E:まったくあてはまらない」の各尺度の人数は、回答「A:よくあてはまる」と「B:ややあてはまる」の人数を比較すると、「C:どちらでもない」、「D:あまりあてはまらない」、「E:まったくあてはまらない」の各尺度の人数が少ない。そこで、各尺度の「C:どちらでもない」、「D:あまりあてはまらない」、「E:まったくあてはまらない」の人数を合計し、C+D+Eと表記して、「A, B, C+D+E」のそれぞれの人数分布を算出した結果を、因子ごとに表6から8に示した。表6から8に示したように、改善後のA回答した人数は、全面的増えて、C+D+Eの人数は減少した。

表5 改善前後の運動有能感における回答結果
（筆者作成）

因子	質問項目	改善	回答（人数）				
			A	B	C	D	E
身体的有能さの認知	1. 運動能力がすぐれていると思います。	前	87	58	28	8	2
		後	127	40	14	3	7
	2. 運動について自信をもっているほうです。	前	92	51	32	7	1
		後	140	30	12	3	6
	3. たいていの運動はじょうずにできます。	前	123	40	16	2	2
		後	160	20	6	1	4
	4. 運動のじょうずな見本として、よく選ばれます。	前	135	29	13	5	1
		後	160	20	6	2	3
統制感	5. できない運動でも、あきらめなくて練習すればできるようになります。	前	95	35	30	13	10
		後	120	25	22	12	12
	6. 練習すれば、かならず技術や記録はのびると思います。	前	93	36	29	11	14
		後	127	21	21	11	11
	7. 努力さえすれば、たいていの運動はじょうずにできると思います。	前	112	26	20	10	15
		後	138	15	20	8	10
	8. 少しむずかしい運動でも、努力すればできると思います。	前	34	46	50	23	30
		後	94	25	36	14	22
受容感	9. いっしょに運動をしようときそってくれる友だちがいます。	前	123	23	19	6	12
		後	146	17	13	5	10
	10. 運動をしているとき、友だちがはげまし、応援してくれます。	前	96	47	22	9	9
		後	139	23	14	8	7
	11. いっしょに運動する友だちがいます。	前	117	40	16	9	1
		後	149	27	7	3	5
	12. 運動をしているとき、先生がはげまし、応援してくれます。	前	132	27	14	5	5
		後	153	20	7	5	6

注：A よくあてはまる、 B ややあてはまる、 C どちらでもない、 D あまりあてはまらない、 E まったくあてはまらない。

この傾向を統計的に裏付けるために、 χ^2 検定を実施した。その結果、因子Ⅰ～Ⅲの計12項目中、回答Aに関しては9項目、回答Bに関しては7項目、回答C+D+Eに関しては4項目において、統計的に有意な差がみられた。

表6 改善前後の運動有能感（因子Ⅰ）の比較
（筆者作成）

因子Ⅰ	質問項目	改善	回答（人数）		
			A	B	C+D+E
身体的有能さの認知	1	前	87	58*	38*
		後	127**	40	24
	2	前	92	51**	40**
		後	140**	30	21
	3	前	123	40**	20
		後	160**	20	11
	4	前	135	29	19
		後	160*	20	11

注：* p < .05, ** p < .01

表 7 改善前後の運動有能感（因子Ⅱ）の比較
（筆者作成）

因子Ⅱ	質問項目	改善	回答（人数）		
			A	B	C+D+E
統制感	5	前	95	35	53
		後	120	25	46
	6	前	93	36*	54
		後	127**	21	43
	7	前	112	26*	45
		後	138*	15	38
	8	前	34	46**	103**
		後	94**	25	72

注：* p < .05, ** p < .01

表 8 改善前後の運動有能感（因子Ⅲ）の比較
（筆者作成）

因子Ⅲ	質問項目	改善	回答（人数）		
			A	B	C+D+E
受容感	9	前	123	23	37
		後	146	17	28
	10	前	96	47**	40
		後	139**	23	29
	11	前	117	40	26*
		後	149**	27	15
	12	前	132	27	24
		後	153	20	18

注：* p < .05, ** p < .01

2) 改善前後の運動習慣の変化

改善前後の運動習慣の変化を「はい」「いいえ」の人数変化で検討した。表 9 に示したように、改善前に比して、改善後の運動習慣が「いいえ」の人数が減少し、「はい」の人数が増加した。このことを統計的に裏付けるために、McNemar 検定を行った結果、改善前後の運動習慣においては、全体的に統計的に有意な差がみられた。

表 9 改善前後の運動習慣の変化

	回答	改善		McNemar 検定
		前	後	
1.朝の授業前に運動をしていますか	はい	31	73	21.551****
	いいえ	141	99	
2.昼休みに運動をしていますか	はい	36	83	28.213****
	いいえ	132	85	
3.放課後に運動をしていますか	はい	123	139	3.629†
	いいえ	62	46	

注：† p < .10, **** p < .001

このようなことから、教師の授業改善前に比して、授業改善後の子どもの運動有能感及び、子どもの運動習慣において、変化が生じたといえる。

5. 結果のまとめと考察

本研究では、中国の子どもの運動有能感を高め、運動習慣を向上させる授業のあり方を明らかにするために、日本の高橋らが提唱する「子どもが評価するよい体育授業」の基礎的条件に基づいて、教師の授業改善に向けた指導を行った結果、教師の授業に対する考え方や行動が変わり、子どもの運動有能感と運動習慣が改善された。このような結果から、以下のようなことが考えられる。

まず、授業の改善については、教師は子どもによい体育授業を提供したいという動機のもとで、自分の授業について「専門家の先生の方から、自分の授業改善に対して、いろいろ指導をして欲しい」という積極的な姿勢をもっていた。そのため、教師は改善に向けた指導を真剣に学び、その結果、教師の授業に対する考え方の変化がみられた。教師のこのような変化は、授業場面と教師の相互作用行動の改善に影響をしたと考えられる。さらに、授業場面と教師の相互作用行動の改善が、子どもの運動有能感を高め、子どもの運動習慣を改善したことに繋がったと考えられる。

子どもの運動有能感が高まった結果については、教師の肯定的フィードバックと励まし行動の増加や、「運動学習場面」の時間量の増加によって、温かい・明るい授業の雰囲気となったことが影響していると考えられる。授業の雰囲気が変わったことにより、子どもは自分の運動目標を達成に向けて、何回も練習をすることが可能になったと考えられる。このような体育授業を通して、今まで「わかっていなかったことがわかるようになり、できていなかったことをできるようになった」という、成功体験の重なりが、運動有能感の向上に繋がったと考えられる。

子どもの運動習慣の改善については、子どもの運動有能感の高まりとの関連が考えられる。なぜならば、運動有能感が高まった子どもは、運動の楽しさを体験でき、このような楽しさを、授業外でも実感したいという内発的動機づけがなされ、運動に積極的に取り組むようになったと考えられる。

6. 結論

高橋らが提唱する「子どもが評価するよい体育授業」の基礎的条件に基づいての授業改善が、日本だけではなく、中国にも有効な方法であることが確認できた。また、中国の体育授業を、日本の高橋らが提唱する「子どもが評価するよい体育授業」に改善することにより、子どもの運動有能感及び運動習慣を身に付けるには有効であることが明らかになった。

7. 本研究の限界と今後の課題

今回の調査は、以下の2点が課題として残った。

- ① 本研究の調査対象となる「教師・子ども・授業」の数が少ない点である。このため、今後はこれらを増やしていく必要がある。
- ② 今回は高橋らが提唱する「子どもが評価するよい体育授業」の基礎的条件のみを適用して、中国の体育授業を改善する事例研究であった。今後は、「子どもが評価するよい体育授業」の内容的条件に基づいて、中国の体育授業を改善する研究を行う必要がある。

倫理的配慮

本研究は、日本体育大学におけるヒトを対象とした実験等に関する倫理審査委員会の承認（承認番号第017-H012号）を得て実施した。

注

1) 事前の予備調査の結果

本研究を行うにあたり、事前に予備調査を行った。予備調査では、教師の授業の期間記録と相互作用行動の調査を行った。①期間記録の授業場面の結果では、教師の授業場面の時間量に関しては、「マネジメント場面」(38.1%)と「学習指導場面」(23.4%)が多く、一方で、「運動学習場面」(38.5%)が少ない様子が見られた。また、授業場面の頻度が非常に多いことも確認された。②教師の相互作用行動を観察した結果では、否定的なフィードバックが非常に多く(19回)、一方で、肯定的フィードバック(4回)や励ま

し(3回)行動が極めて少ない様子が確認された。このような調査結果から、中国の体育授業を改善するには、教師の授業場面と相互作用行動の改善が重要な課題であると認識された。

2) よい体育授業のための基礎的条件

高橋によると、基礎的条件とは、①学習従事時間が確保されている。②学習の規律が確立している。③教師の肯定的な動きかけがみられる。④生徒の情緒的解放や学習集団の肯定的関わりがみられる、といった4つの条件のことである。(高橋, 1994c)

3) 対象となった教師

対象となった教師は、小学校との間での実験協力に関する説明会の際に、より自分の授業改善に意欲を示していたため、本研究の調査対象に決まった。

4) 対象とした授業の内訳

本研究の対象となった授業は、担当教師が4年生4クラスに行った計27回の授業であった。各クラス8回の授業を行う計画であったが、対象校の体育館が破損して使えないという事情から、本研究の授業は全て校庭で行うこととなった。しかし、天候不良により、A組は8回、B組とC組は7回、D組は5回の授業となり、クラスによっては8回の授業ができなかった。そのため、実際に実施した授業のみを対象とした。

5) 授業場面の因子

①「マネジメント場面」とは、クラス全体が移動、待機、班分け、用具の準備、休憩などの学習成果に直接繋がらない活動を行う場面である。②「学習指導場面」とは、教師がクラス全体の子どもに対して説明、演技、指示を与えている場面である。③「認知学習場面」とは、子どもがグループで話し合ったり、学習カードに記入したりする場面である。④「運動学習場面」とは、子どもが準備運動、練習、ゲームを行う場面である。

6) 授業場面の頻度

授業場面の頻度とは、高橋・吉野(2009)と同

様に授業内で体育授業場面における4つの各場面が出現した回数のことである。

7) 運動有能感の因子

①身体的有能さの認知とは、自己の運動能力、運動技能に対する肯定的な認知である。②統制感とは、自己の努力や練習によって、運動をどの程度コントロールできるかの認知である。③受容感とは、教師や仲間から受け入れられているという認知のことである。

8) 運動習慣

運動習慣に関する調査は、東京都世田谷区教育委員会が実施している「子どもの健康に関する調査（生徒記入用）」（世田谷区教育委員会・日本体育大学野井研究室，2018）を中国語に翻訳し、専門家（日本語と中国語をできる大学教員3人）の許可を取った上で調査を実施した。

引用・参考文献

中国学生体质与健康研究組（2012）「第三部分 教育部关于2010年全国学生体质与健康调研结果公告」中国学生体质与健康研究組編「2010年中国学生体质与健康调研报告」高等教育出版社，pp.75-77.

深見英一郎・高橋健夫・細越淳二・吉野聡（2000）「体育の単元過程にみる各授業場面の推移パターン」『体育学研究』45,pp.489-502.

北真佐美・岡沢祥訓・森田美穂子（1995）「体育授業における生徒の身体的有能感と授業評価との関連」『奈良教育大学教育研究所紀要』31,pp.15-23.

松本裕史・竹中晃二（2004）「運動有能感と定期的運動行動の関連について」『健康支援』6,1-7.

文部科学省（2001）「子どもの体力の現状と将来への影響，（1）子どもの体力の現状，1. 体力・運動能力の低下」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1344530.htm（2019年2月26日参照）

中野貴博（2008）「子どもの生活時間の今、昔」『子どもと発育発達』6,pp.66-70.

中野貴博・春日晃章・村瀬智彦（2010）「生活習慣および体力との関係を考慮した幼児における適切な身体活動量の検討」『発育発達研究』46,pp.49-58.

日本学校保健会（2006）「平成18年度児童生徒の健康状態サーベイランス事業報告書」『日本学校保健会』pp.61-62.

岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎（1996）「運動有能感の構想とその発達及び性差に関する研究」『スポーツ教育学研究』16（2）,pp.145-155.

岡沢祥訓・三上憲孝（1998）「体育・スポーツにおける『内発的動機づけ』と『運動有能感』との関係」『体育科教育』46（1）,pp.47-49.

岡沢祥訓・仲田幸代（1998）「運動嫌い」と運動有能感との関係」『体育科教育』46（13）,pp.42-44.

岡沢祥訓・諏訪祐一郎（1998）「『運動の楽しさ』と『運動有能感』との関連」『体育科教育』46（12）,pp.42-44.

スポーツ庁（2017）「平成29年度体力・運動調査結果の概要及び報告書について，平成29年度体力・運動調査結果の概要，体力・運動能力の年次推移の傾向（青少年）」
www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/chousa04/tairyoku/kekka/k_detail/1409822.htm（2019年2月26日参照）

高橋健夫・長谷川悦示・刈谷三郎（1994a）「体育授業の『形成的授業評価法』作成の試み」『体育学研究』39（1）,pp.29-37.

高橋健夫・大友智・高田俊也（1994b）「資料；体育の授業分析の方法」『体育の授業を創る』大修館書店,pp.238-240.

高橋健夫（1994c）「よい体育授業のための基礎的条件」『体育の授業を創る』大修館書店，pp.18-20.

高橋健夫・岡沢祥訓・中井隆司（1989）「教師の『相互作用』行動が児童の学習行動及び授業成果に及ぼす影響について」『体育学研究』34,pp.191-200.

高橋健夫・岡沢祥訓・中井隆司・芳本真（1991）「体育授業における教師行動に関する研究—教

王明亮ほか

- 師行動の構造と児童の授業評価との関係—『体育学研究』36,pp.193-208.
- 高橋健夫・吉野聡（2009）「8 体育授業場面を観察記録する」『体育授業を観察評価する』明和出版,pp.36-39.
- 武田正司（2006）「児童における体力と運動有能感との関係（第2報）」『盛岡大学紀要』23, pp.67-74.
- 世田谷区教育委員会・日本体育大学野井研究室（2016）「世田谷3快（快眠・快食・快運動）プログラム『子どもの健康に関する調査』『子どものからだの調査』2014年度報告書」『世田谷区教育委員会』pp.111-114.
- 吉田伊津美・杉原隆・近藤允夫・森司朗（2002）「幼児の運動能力の年次推移」『体育の科学』52（1）, pp.29-33.